

## 明治 31 年，弱小なる帝大薬学科の苦しさ

薬学雑誌 1898 年度 516 頁，517 頁

仙台の地区通信を読んでいたら，徒然草みたいな記事があった。

「ある医学士たる軍医曰く，帝国大学の各分科大学においては，一講座を一名にて受け持つことは云ふまでもなく，更に講座を分け分担して各々その精通を教授することさえあり，例えば衛生には緒方博士，坪井博士あり，薬物には高橋博士と未来の森島(留学中)あり，解剖および組織には田口博士と小金井博士あり，生理には大澤博士と大澤学士(留学中)あり，その他内科，外科にても各講座を分担せらる，しかるに薬学科を見れば一名にて数科を担当す，実に薬学連は諸科に精通なること弁慶の如し，と談笑せられたりと云ふ」

弁慶とは，何か馬鹿にされたような話である，さらにもうひとつ，

「当地電灯会社就職のある工学士曰く，大学の各分科大学

には皆講座ありて，何学講座と勅令に明記しあり，ひとり薬学科には三講座とのみありて，何学の講座やら明瞭ならず，しかれども，薬学科規則をみれば十数以上の科程あり，我輩は少しも三講座の理由は解せない，君説明したまい，と云ひけるに老練の薬学家も大いに閉口して，君は常に難問を發して我輩を困らせる，今後はもはや斯くのごとき問ひは“講三”で御“座”る，と語られし由し」。

いろいろ分かっている老練の薬学家，うまいこと話をまとめたものだ，当時は医薬分業問題で医師たちと対立し，大学では入学者がいない年もあるほど学生が少なく，医科大学内で薬学科の独立が危ぶまれていた頃である。

帝大の薬学始祖 3 講座は，生薬学(下山順一郎)，衛生裁判化学(丹波敬三)，薬化学(長井長義)と思っている人もいるが，こうしてみると各教授，講座は薬学全科目を分担し，講座名も生薬，薬化などと特定するものではなかったことが分かる。

小林 力